

躍

季刊 [やく]
2010 Autumn | 第10号
関西電力株式会社

躍
季刊 [やく]
2010 Autumn | Number 10

 関西電力



特集 ● [鼎談] 基軸を探る

クールジャパン、
ソフトパワー大国・日本の文化力

奥野卓司 / 秋元 康 / 手塚 眞

関西電力株式会社





表紙

「色づいて艶めいて、野趣に富む秋の草ぐさ」

高原に群生し、大ぶりの葉が特徴の雄宝香。

夏に咲かせた花が終わり、

葉は、ひと仕事終えたかのように

誇らしげに色を変え傷を見せる。

深紅に艶めく山芍薬の実と、革袋に入れ、

野趣に富む秋の空間を形づくる。

花／雄宝香の葉、山芍薬の実

器／ペルーの革袋

所収／平凡社刊「別冊太陽 川瀬敏郎 四季の花手帖②」

撮影／滝浦哲



花人 川瀬敏郎 かわせとしろう

一九四八年京都府生まれ。幼少より池坊の花を学び、

日本大学芸術学部を卒業後、パリ大学へ留学。演劇、映画を研究する。

帰国後は流派に属さず、いけばなの原型「たてはな」と、

千利休が大成した自由な花「なげいれ」をもとに、

花によって「日本の肖像」を描くという独自の創作活動を続ける。

二〇〇九年「京都府文化功労賞」受賞。

03

特集①「鼎談」基軸を探る

クールジヤパン、

ソフトパワー大国・日本の文化力

奥野卓司／秋元康／手塚眞

19

Visitor's さんか「大阪編」

「芸術文化を支える大阪の『人』の力」川井郁子

21

特集②「ルポ」MOVE ザ関西

関西文化の底力を検証する

36

街の灯り物語

「人の本質・心の内を、夜の街の情景で描きたい」真山仁

39

エコルーツ紀行

資源を生み生命を育む湿原 柴崎友香

——炭鉱と湿原の釧路を行く

50

クリッピングファイル

「高レベル放射性廃棄物、地層処分への課題」坂井悦郎

「低炭素社会の住まいのあり方」坂本雄二

クールジャパン、 ソフトパワー大国・ 日本の文化力

二〇〇二年D・マックレイが「ジヤパンクール」を提唱し、〇四年J・ナイが「ソフトパワー」概念を提唱。文化力に注目が集まり、とりわけ日本のマンガやアニメ、ゲーム、食、ファッション、音楽などが国際的に評価されているにもかかわらず、自覚に乏しかった日本。クールジャパン関連の政策も数多く出されたが、大きなうねりにはならなかった。今、改めて国も「文化産業大戦略」策定に動くなか、「日本の文化力」の現状を見ながら、その源泉と生かし方を考えたい。

奥野卓司

関西学院大学総合図書館長・大学院社会学研究科教授

手塚眞

ヴァンクリスト／ネオネットラ代表

秋元康

作詞家



日本文化の現状をどう見ているか？

高尚な芸術でなくサブカルを売ることに

真剣になれない日本人

奥野 きょうは今をときめく日本のクリエイターお二人と話ができるということで大変楽しみにしています。

テーマは「クールジャパン、ソフトパワー大国・日本の文化力」。つまり、これまで日本人自身あまり注目してこなかった日本のアニメ、マンガ、ポップスなどが世界で高く評価されていて、それを後押しする形で政府もクールジャパン政策として文化を世界に発信しようとしている。背景には、日本の主力産業の自動車や家電など製造業が低迷し、新興国の追い上げもあって産業競争力が低下。だから文化に力を入れようという側面もある。

こうした動きが本場に日本の文化力の向上につながっているかどうかは疑問もありますが、私とお二人の違いは、私はそうした文化なり社会の変容を研究している立場。お二人は直接そういうものをつくられたり演出されたりしているので、その観点から今のよう状況はどうお考えでしょうか。

秋元 まずクールジャパンと言われるもの、つまりコンテンツとは何か、文化的価値なり文化とは何か、の議論がまだ日本では成熟していない。例えばこれは高尚な文化で、これはサブカルだという定義づけがまだあり、マンガやアイドルを大人が真剣に売り出すことへの抵抗が

たわけですよ。それと芸術は全然別だと。けど映画なんかすごく難しく、手塚さんの作品などは芸術に位置するか、サブカルチャーに位置するかは結局、観る人の評価です。ともかくハイカルチャーとサブカルチャーに分類している限り、今クールジャパンと呼び得るものの全体を包括することができない。

韓国や中国はそれに国家的に取り組もうとしていて、大学づくり、人材づくりからビジネスモデルづくりまで国が先頭に立ってやっている。日本もやっていないわけではないが、例えばアニメの殿堂のようにまず外側を考えて、それをつくればとりあえず日本のアニメ制作は進むという考え方。これは基本的に今までの箱物行政と変わっていない。中身のコンテンツなり文化を中心に考え、だから外側はこうしようという考え方ではない。

手塚 コンテンツという言葉は、いろいろな使い方がありますが、今の映画やテレビ番組に限って言えば、実は半分はパッケージの話。売れているマンガがあり、売れているタレントさんがいて、それを組み合わせれば映画ができあがる。これがコンテンツですということになる。しかし、実制作者から言えばそれはあくまでもパッケージ。海外の映画製作では基本はオリジナルストーリーから立ち上げるケースがまだまだ多い。日本では自分たちで中身をつくらうという前に、売れているものを描えればできあがるという誤解がコンテンツ制作に蔓延している気がします。

ある。日本が韓国や中国に負けてしまっているのは、車や家電などの加工貿易から今度はコンテンツだということに考えが切り替わっていない点。韓国は既にコンテンツビジネスにシフトしていて、素晴らしいドラマや映画、音楽、このコンテンツはすごいぞ、資源がなくても輸出できるぞという点に気づいたわけです。ところが日本は遅い。そもそも文化とは何かを考えないと、クールジャパンは進まないように思います。

手塚 おっしゃるとおりですね。日本の政策はよく箱物行政だと言われてきたが、箱物というより僕はパッケージ文化という気がするんです。外つっらの飾りをどうするかから固めて、中に入るものは後で考えればいい。こういう人を連れてきて、こういうものがあれば、それで成立するというところで、実際の中身には興味がない。プロジェクトを立ち上げて行政や組織の方と話していると、中身の話以前にどんな形かを最初に問われることが多い。中身は粗末でもパッケージだけきれいであればいい。これはよかれあしかれ日本の包装文化。何でもかんでも包んで、つまらないものですがと差しあげるような、そういう流れの上に文化があるような気がします。

コンテンツよりパッケージに目が向き、箱物行政から脱却できていない

奥野 二つの点を指摘いただいたと思います。要するに今までアニメ、マンガなどはサブカルチャーと呼んでい

「ジャパンクール」

日本のかっこよさ(クール)。米国のジャーナリスト、ダグラス・マッグレイ(1975-)が外交誌「フォーリンポリシー」二〇〇二年五月/六月号に寄せた論文「Japan's Gross national cool」が、日本はGNPの数値ではもはや大国とはいえないが、日本のアニメやゲーム、ポップミュージックやファッション、料理などが「GNP」(Gross National Cool)国民総魅力度)では世界一の大国だと主張。

「ソフトパワー」

米国の国際政治学者で国防次官補などを務めたジョセフ・ナイ(1937-)が〇四年に提唱した概念。軍事力や経済力など対外的強制力のあるハードパワーに対し、文化や政治的価値観、政策的魅力などソフトパワーへの支持を広めることで、国際社会の信頼や発言力を確立しようという考え方。

アニメの殿堂

国立メディア芸術総合センター。〇七年日本政府が設立を提唱したが、〇九年撤回。



日本のマンガが並ぶ韓国・ソウルの書店(奥野卓司氏提供)

目利きがないクールジャパン、文化を規定しすぎると取りこぼしが増える

秋元 クールジャパンに、まだ目利きがないんですね。肌でわかっている人が少ない。行政など、例えば秋葉原の文化が何かすごいことになっているらしい、世界へのコンテンツになるらしいという情報をキャッチしているだけで、体感しているわけではないので、頭で理解しようとしている。

僕は、芸術もサブカルも一緒にいいじゃないかと。歌舞伎や能、狂言は芸術で、アイドルやアニメはサブカルという分類は意味がない。アイドルやアニメは何百年かしたら歌舞伎や能、狂言のようになるかもしれない。だから頭で考えるクールジャパンでなく、もっと目利きを入れて、本当に好きな人たちを加えて進めないと、底の浅さを見透かされます。流行りものだから乗っておこうというのでは、到底、勝てない。

手塚 クールジャパンという言葉自体、外にいる人間が日本のものを見てそう呼んでいるわけですね。それが大体十年前。日本発の映画やマンガを見てクールだ、クールだと外側で言っていた。いざ、彼らが日本にやって来て何と言ったかというところ、日本はクールどころじゃなくエクストリーム（過激）だと。確かに海外のものとは比べると、日本には極端なものが多い。例えば秋元さんのやられている、何十人もいるアイドルのプロジェクトなんて海外にない（笑）。これはまさにエクストリーム。でも、

それが実は面白かったりする。

ただ、海外の人たちは、日本に来るとあまりにもいろんなものがすご過ぎて、自分を見失うと言いますね。そういう海外との温度差を日本は理解できていない。海外がクールジャパンと言って面白がっているところだけに、日本人は接している気がするんです。

奥野 確かにクールジャパンは外から言われた言葉ですね。日本がものづくりで自信を失っていた一九九〇年代以降、意外に海外で受けていたものがあつた。ジブリのアニメなどがそうですが、海外でクールだと言われたから、これは価値があるんだと日本が思っている。

秋元 僕はスタジオジブリの大ファンですが、例えばスタジオリブのものはクールジャパンとして国全体が応援する。でも、それ以外はなかなか国が本気にならないのはおかしいんじゃないか。一流のものに対してはみなさん、これは日本の文化だと言うが、ちょっとおバカなもの、下世話なもの、二流三流なものも含めてクールジャパン。そう腹をくくらないと、いいところだけ見せようとしても難しい。芸術って、危険性も伴うんです。

あるいは韓国はアイドルを国策として売り出している、交通費から宿泊代、出張費を負担して世界へ送り込んでいる。日本も今、Kポップの襲撃に遭っている。一方、日本は文化的なものの海外公演は支援しても、アイドルの出張費までは出さない。でもそこをひっくるめてやっていかないと、クールジャパンは勝てないですよ。

要するに、世界に輸出していくとき、偏見を持たない

奥野 卓司 おくのたくじ
関西学院大学総合図書館長・大学院
社会学研究科教授(情報人類学)
1950年京都市生まれ。京都工芸繊維
大学卒、同大学院修士課程修了。学
術博士。京都芸術短期大学助教授、イ
リノイ大学客員準教授、甲南大学助教
授、教授を経て、97年より関西学院大
学教授。国際日本文化研究センター客員
教授も務める。主な著書『江戸「粋」の
系譜』『ジャパニクルと情報革命』『ジャ
パニクルと江戸文化』『日本発イット革
命—アジアに広がるジャパニクル』『情
報人類学の射程』など。
[http://www-soc.kwansei.ac.jp/
okuno/](http://www-soc.kwansei.ac.jp/okuno/)



でいられるかどうか。あり得ないものが今、世の中に出
ていき、あり得なければあり得ないほど面白いわけです。
例えば『源氏物語』などはフランス語や中国語に訳す際、
国が援助するかもしれない。でも、世の中は思いがけな
いところからヒットが生まれ、ベストセラーになる。こ
れが文化だ、これがクールジャパンだと限定していると、
いろんなものをこぼしてしまう。そこが一番心配です。

日本の文化力を検証し針路を探ると？

GNC、裾野の広がりが高みを支える—— 目利きも数寄者もいた江戸時代

奥野 目利きがないと言われたが、文化というのは評
価しにくいんですね。つまり経済力ならGDPやGNP
がどれだけ伸びたか、自動車や家電製品を何台売ったか
などで評価できた。しかし文化力となるとGNC (Gross
National Cool)、国民総魅力度という概念も提唱されて
いるが、一体どう評価すればいいか。

この前、秋元さんの番組を見ていて同感したのは「自
分は一切マーケット調査をやらなんだ」と。我々社会
学者はマーケット調査をやる側、それを教える立場です。
だけど、実は調査をしても市場がわかるわけではない。
例えばアキバのメイド喫茶に行ったら、目のつけどこ
ろを知らない人は何が大事かわからない。それは教えら
れるものではないんです。

ただ、例えば歌舞伎や黄表紙などは昔は目利きがいた

アイドルプロジェクト

秋元康氏プロデュースで
〇五年デビューした女性
アイドルグループ「AK
B48」。「会いに行けるア
イドル」をコンセプトに、
秋葉原の「AKB48劇場」
でチームごとにほぼ毎日
公演。

ジブリのアニメ

アニメ作家・監督の宮崎
駿(1941-)の制作会社
「スタジオジブリ」制作
のアニメ。「天空の城ラ
ピュタ」「となりのトト
ロ」「もののけ姫」「千と千
尋の神隠し」「ハウルの動
く城」「崖の上のポニョ」
など諸外国でも高い評価
を受けている。

韓国・中国の戦略

韓国はアジア通貨危機後
の九八年文化立国戦略を
打ち出し、〇三年「世界
文化産業五大強国宣言」、
〇八年「国家ブランド委
員会」設置など、クリエイ
ティブ産業振興政策を国
策として展開。「韓流」映
画・ドラマ、Kポップが日
本にも続々上陸。また
〇九年中国が「文化産業
振興計画」を、台湾も「文
化創意産業発展方案」を
打ち出し、「華流」の世界
進出も目覚ましい。



2009年、AKB48のニューヨーク公演。観客たちも大いに盛り上がった ©AKS



舞台上のAKB48(ニューヨーク公演にて) ©AKS

わけです。別に海外から評価されたから歌舞伎や浮世絵が日本で発達したわけではなくて、目利きもいたし、それをサポートする数寄者もいた。それが今、目利きといえばマニアだけ。マニアはマニアの域を出ず、国家政策として進めようとしても、動かない。

秋元 国家政策でやるときに、国民の総意であったり、価値観を一致させなきゃいけない。外からは例えば秋葉原文化が面白い、クールジャパンだと言われているが、日本国内で僕より上の世代は、例えばマンガなんて、アニメなんて、アイドルなんてと思っている人が多い。そのなかで国策としてやる難しさが、まだある気がします。**手塚** もう一つ、かなり誤解があるのは、海外でクールジャパンと言われてヒットした幾つかのコンテンツは決して日本を代表するものではなく、作家のものなんです。優れた作家の作品が評価され、それがたまたま日本人だった。日本のアニメ全般が評価されたわけではない。もちろん素晴らしい作品もありますが、とても売り出すレベルにないものもある。なのに日本は全部一括り。いわばプロ野球も草野球も一緒という考えですね。

奥野 逆に日本の場合、プロ野球も草野球もあり、その間に高校野球もある。草野球の広がりやプロ野球の高みを支えてきた。江戸時代の浮世絵も、広重、歌麿のようにのちに高く評価されるものもあるが、では下のものがダメだったかというところではなく、下の草野球的な、庶民の創作意欲がトップを支えている側面もある。そもそも歌舞伎や浮世絵にしても江戸時代のポップカル

チャー、庶民の文化だったわけですからね。

日本にはもともとプロもアマチュアも目利きやサポーターもいて、町民文化の厚い層があったのに、今は韓国や中国に後れをとり、負けているんじゃないでしょうか。

手塚 そんなことはない。というのは中国も韓国も、国は環境づくりに力を入れていますが、作家個人を育てることはないがしろにしている気がするんです。韓国映画は一時期的ものすごく隆盛を見せてきたが、その後、途切れたのは、これぞという作家が出てこなくて、それを応援する雰囲気もなかったから。ざっくりと映画界やアニメ界全体に金は投入しているんですけど、この人を育てようというところまでは行っていません。

今、彼らは頑張っただけで外にどんどん輸出していますから、目立つことは目立ち、日本が負けている気がする。ただ中身からすれば別に負けているわけではなく、日本が消極的過ぎるだけなんです。

日本は捨てたものじゃない、

世界戦略で日本人の活躍の場を増やす

秋元 今は過渡期でしょうが、僕はAKB48というアイドルグループを世界に持ち出す試みを始めました。それをするとうるさくなるかなと。つまり昔、野茂さんがメジャーリーグに行ったとき、多くの人は無理じゃないの？と見ていたが、イチロー選手や松井選手が後に続き、メジャーリーグで日本人が活躍することも違和感がなくなってきた。だから日本が今クールジャパンを頑張れば、

数寄者 すきしゃ
芸道に熱心な風流人。

黄表紙
江戸時代の大人向けの絵物語。

AKB48の世界戦略
AKBを海外進出させ、世界規模でAKBというフォーマットのフランチャイズ化を図ろうというもの。つまり「会いに行けるアイドル」○48「十代中心の女の子のチーム制・四十八人編成」○「研究生からの昇格、ファン投票による選抜総選挙」などを基本に、パリ48、ニューヨーク48など各地でフランチャイズをつくり、最終的には選抜による「世界48」をつくらうというもの。

もしかしたら無理だと思われていた欧米の音楽業界や映画界、多様な分野で日本人が活躍できるし、それが高度経済成長期とは違う輸出分野になっていくんじゃないか。**奥野** 僕はインターネットの力がそれをバックアップするように思います。アメリカで日本のクールカルチャーについて講演をしたとき、それを実感した。

一昨年、日本の文楽が十八年ぶりにアメリカ公演を行い、イリノイ州のシャンペーンという大学町へも行った。そこは学生が多いから、文楽とアニメの関連を説明すれば、アニメが好きな学生も文楽を見てくれるだろうと、僕が行ったわけです。そして『涼宮ハルヒの憂鬱』の話をしたら、既に彼らは知っていて、そのコスプレをした学生さえ来るんです。たとえ規制があっても、インターネットで日本のアニメは世界に流れている。

秋元 ですから日本の若者たちに言いたいのは、日本は捨てたものじゃないと。僕らの世代は欧米に憧れていたが、今、世界の若者が日本はすごいと思っているんです。

「Kawaii」、翻訳できない自前の魅力で「何だこれは」と思わせて勝つ

奥野 確かにユーザーというか受け手の側から見ると、やっぱり日本はすごいなと。アイドルにしるアニメにしろ、そう思う。この魅力って何でしょうね。

手塚 日本って何とかナイズする力がすごい。大昔は国家的に中国ナイズし、明治以降は欧米ナイズ、特に戦後はすごい勢いでアメリカナイズしていった。常に自分た

ちが憧れる存在に全力で化身していく。ところが今、世界でトップクラスの豊かな国になり、その上が見えなくなった。上が見えないということは憧れもなくなって、どうしていいかわからない。これは極端な発想ですが、日本が日本ナイズすることもあるかもしれない。海外の人が見て日本のここは面白いというところに自分たちが倣っちゃうと。よりそれを羨みのあるものに変えていくと。そこに次の日本が見えてくるような気がする。

秋元 そのとおりですね。AKBは今、海外公演を繰り返して、観客は初めは引いているんです。つまりニューヨークでやると、ブロードウェイを観られた人たちは、歌やダンスのあまりのひどさに「何なんだ、これは」と(笑)。ところが三曲目、四曲目になると、十代の子たちが一生懸命汗をかいて歌って踊っている、その何だかわからないパフォーマンスにぐっと惹かれていく。僕はこの「何だ、これは」に勝機があると思う。

つまり今までは欧米ナイズとか、どこかの真似をしたものを輸出しようとしていたので、本場には勝てないわけです。だけど、見たことのないものを持っていくと、それはドンと行く可能性が大きい。だから、日本の文化はすごいということにもっと自信を持つ。みんながそこに気づいたとき本当の意味のクールジャパンが始まる。**手塚** やっぱり翻訳できないニュアンスがあると思う。秋元さんのAKBもそうですが、何と云っていいかわからない、形容詞がない。例えば「かわいい」という言葉はアメリカでは「キュート」「ヨーロッパだと「スイート」



秋元 康 あきもと やすし
作詞家
1956年東京都生まれ。中央大学文学部中退。高校時代から放送作家として活躍。83年以降、作詞家として、美空ひばり『川の流れのように』、EXILE『EXIT』、ジェロ『海雪』(2008年日本作詞大賞受賞)などヒット曲多数。監督映画『グッバイ・ママ』、企画・原作映画『着信アリ』シリーズなど。アイドルグループ「AKB48」の総合プロデューサーとして、このビジネスモデルを世界に発信するプロジェクトを展開中。京都造形芸術大学副学長も務める。著書『企画脳』『おじさん通信簿』、小説『象の背中』ほか多数。
<http://www.kyoto-art.ac.jp/info/about/vpresident1.html>

かもしれないが、イコールじゃない。どれとも違う「かわいい」がある。アイドルたちのかわいさは、そのまま受けとめてもらうしかなくて、これが日本のかわいさなんだと。わびさびみたいなものですかね。

奥野 かわいいとか、わびさび、粹——など、今や日本語がそのまま国際語になり、それでしか表現できない美意識が世界でも認識されているんですね。

秋元 例えば納豆を輸出しようとする、臭いを消した納豆をつくらうとする。あるいは糸を引く、つまり腐っているイメージが良くないので、糸を引かないようにする。そうするから負けるんです。臭くて糸を引いて、これはあなたたちには理解できないでしょうと、そのまま持っていたほうが当たる可能性が高い。

今までは、僕も欧米に憧れた世代なのでどうしてもアメリカ風、イギリス風にとやり過ぎた。しかし考えてみると、僕が中学・高校時代、ミッシェル・ポルナレフやピートルズにすごく憧れ、原語で聴いていた。AKBの世界戦略でも同じことが起きていて、パリ公演のとき、サードビスで『桜の花びらたち』をフランス語にしたんですが、受けなかった。何でそのまま日本語で歌ってくれないんだと。そこにヒントがある気がするんです。

奥野 かわいいと言えば、僕は、今の世界的課題である「低炭素社会」に向けての先端技術と、「かわいい」「クール」を結びつけたとき、日本の優位性が出てくると思っています。例えば電気自動車を「かわいく」つくる。キャラクターを描いた「痛車」(イタシャ)にすれば、「低炭



「涼宮ハルヒの憂鬱」
谷川流のライトノベルを原作とするアニメ。兵庫県西宮市周辺を舞台に展開される非日常の学園ストーリー。ゲーム化もされている。写真はコスプレをしたイリノイ大学の学生(奥野卓司氏提供)。

ミッシェル・ポルナレフ(1944~)
フランスのポップ・シンガーソングライター。七〇年代に「シェリー」に口づけ「愛の休日」などがヒット。

素社会」の技術力を「クール」にアピールできるんじゃないか。

実際、クールの根は日本のなかにあります。近頃、日本の若者の間で歴女ブームとか和 문화への関心が高まっている。彼らは日本の伝統に今まで自分が体験したことのない異文化としての魅力を感じていて、そこでクロスカルチャーする面もありますね。

もう一つ、コピーの面白さも日本にはある。江戸時代に西洋から持ってこられた機械時計を日本の時間にあつた和時計にするとか、戦後もアメリカのポップスを日本で坂本九が歌った。しかし坂本九はあくまで歌謡曲。そういう何々ナイズの面白さも日本にはある。

秋元 インドのカレーをカレーライスにしたわけだから**手塚** それは二つの意味があつて、日本人の舌に合わせるという意味と、逆に日本人の舌にすら合っていない何か特殊なものになったりする。

例えば日本人の目はぱっちりしていないというトラウマがあるのか、女の子たちはつけまつげをするんだけど、それがどんどん極端になって、今、三重（！）につけまつげをするようになってる。こうなるともう欧米風ですらなくて、それを欧米人が見て驚くわけです、この日本人の女の子の化粧は何なのかと。それがすごいと輸出され、向こうのアイドルやセレブが真似をする。だから単純なコピーじゃなく、何か捻れたものが生まれてくる、そんな面白さがあります。

ソフトパワーの生み方・生かし方は？

「もの」でなく「こと」
情報やソフトは対価の見極めが難しい

奥野 日本は優れた文化力を持ち続けているわけですが、これをもう一步進めるには何が必要でしょう。

秋元 やっぱり出てきた文化を保護して育てられるかどうか。日本がせっかくなつても、日本人は子供の遊びだと見ているから、韓国や中国に真似られて、今度はそれが世界を席卷して強力なコンテンツになってしまいうな不思議な現象が起きている。

奥野 日本人がつくったものが外国でどんどん不正コピーされているという側面もありますが、文化というのは、もともと「もの」ではなくて「こと」ですよね。あるいはソフト。ここで対価を得ること自体が難しい。

先頃亡くなった梅棹忠夫さんが『情報産業論』の中で、情報産業のコンテンツはお布施だと。ご利益があつたと思う人は払うが、別に払わなくてもとがめられない。情報への対価は享受した側の一方的な判断によって支払われるお布施のようなものだから、これをビジネスとして成立させていくことが必要だとおっしゃっていますね。

手塚 文化的価値という言葉がありますが、これは言葉のマジックで、文化そのものに価値はない。コンテンツそのものも、お金に換算できるものじゃない。ただ、それをパッケージに入れて売り買いする、そのパッケージ料は出てくるし、文化を育てる環境やメディアにはお金

手塚眞氏の監督映画「白痴」。主演は浅野忠信、甲田益也子 ©手塚プロダクション



がかかる。映画などは中身をつくるのにある程度の資金力が必要だし、創作にかかる費用はあるので、これをどう保障してつくっていくかだと僕は思うんですよ。

放っておいても文化は生まれる。特にサブカルチャーなんて幾らでも生まれてきますが、それを国力にするためには、文化を生み育てる土壌、広い意味での環境をどう整備していくかだと思うんです。

ネットの中に

文化を生み育てる土壌ができてきた

奥野 例えば自動車産業では、部品をつくる人やデザイナーをする人、それぞれの役割によって賃金が安定してきた。なおかつ非常に裾野が広いので多くの人を養えるが、コンテンツなりソフトは値段を決めにくく、なかなかそれで食べていけない。

江戸時代だと「連」があつたり、芝居小屋があつたり、それを支える大店とか数寄者がいたりした。つまり、たとえ幕府が弾圧しようとしても、文化を支える町民の力があつた。だけど今はなかなか支えきれない。

手塚 そうですね。八〇年代頃までは企業がいろんなものに対して援助をしていたが、その後ばたつとやめてしまった。金持ち文化であつてはいけないような——スポンサーになったり、お金を出すこと自体に後ろめたさを感じる雰囲気とか世相になりつつある。文化を育てるのは、一企業一個人でもいいし、自分が面白いと思うところに注げばいいが、それがやりにくい雰囲気がある。

痛車

車体にマンガ、アニメ、ゲームのキャラクターのステッカーを貼ったり塗装をした車。イタリア車「イタ車」に引っかけ、オタクを自認するファンが自らの「痛」い趣味を自虐的に表現したものだとか。

歴女

史跡や時代小説など歴史物が好きな女性。

梅棹忠夫(1920~2010)

日本の文化人類学のパイオニア、生態学者。国立民族学博物館初代館長。六三年の『情報産業論』で、世界で初めて「情報社会情報産業」の概念を提示した。

連れん

俳諧や狂歌、落しし嗤浮世絵など江戸文化を支えた町民の知的コミュニケーション。

ただ最近、サブカルチャーの現象で面白いと思うのは、結構一般の方々の力で支えられている。草野球からプロになる、まさに一般の中からスターが育つ土壌ができてきた。映像だとインターネットに「ニコニコ動画」というのがあり、みんなが参加する。するとそこからスターなりコンテンツが誕生していく。そういう場をもっと増やしていけばいい。これは今、世界的にも非常に面白い現象ではないか。

奥野 ニコ動や「Uストリーム」などは草の根のものをすくい上げる。その意味ではニコ動に誰でもアップできる環境はいい。その上で淘汰され、良いものが残っていく。**手塚** そう。育てるには段階が必要で、まずはニコ動のような土壌があり、たくさんの方があって、芽が出てくる。自然発生的に目立つ人たちが出てきて、目立つことでどんどんスキルアップしていく。もしかしたら、その中からコンテンツメーカーが出てくるかもしれない。でも、まず最初の土壌、種を蒔ける畑がなければ何も育ちようがない。全員を育てるのは無理だと思うんです。全員に才能があるわけではないが、土壌がないことには芽も出ない。あとは、ある程度芽が出た人たちをどうサポートしていきけるかだと思います。

だから小さい話ですが、僕はニコ動で映画祭をやっています。この映画祭の意味は、ニコ動にアップする人たちの中には作家をめざす人がいるかもしれない。そういう人たちをうまくピックアップして、目立つようにしてあげられないかと。まずはそこまでやる。本当にその中市警の映画課と全米トラック協会の人が通行とか車両をブロックしてくれる。大きな違いは、日本でそれをやると交通を止められたことで文句を言う人が結構多い。でも、向こうでは長い時間止めていても、みんな楽しんで待ってくれている。文化に対する理解度が違いますね。

市警映画課の人たちは撮影にずっと立ち会っていて、もしかすると僕らよりもカット割りなどがわかっているかもしれない。(笑)

手塚 ハリウッドの映画会社がつき合っている銀行の人は、プロの映画人より映画のことをわかっている。企画書を見ただけで、あるいはシナリオを読めば、どのぐらい投資価値があるかが読めると。目利きということでしょうが、そんな人が銀行にいることがうらやましい。

秋元 うらやましいですね。本当に好きな人が、銀行なり行政なりにいないと難しいですね。

奥野 今の日本の会社や役所にもいると思うんですよ。だけど隠れている。

秋元 そこで隠れてなきやいけないのがダメ。私はアニメが好き、こうすべきだと声高に叫ぶようにならないと。**手塚** ですから行政にもアニメ制作課とかを設けて、予算をとって、興味のありそうな職員を担当にする。少なくともそういう窓口があって、何かが進みそうだという夢なり希望を持たせる形がないと、何も動けない。

秋元 組織はカタいけど私は映画やアニメが好きですという人たちが行政にも出てくれば、変えてくれるんじゃないか。そこで風穴を開けないと難しい。

で粘って作家になろうと思う人がいたら、さらに上にピックアップしていかうと。そういう順番が要るんです。

制度的には立ち後れが目立つ日本

おカタい組織にもいるはずの文化好きに期待

奥野 制度や政策面ではどうですか。

秋元 僕は、長い間の経験から先に人を集めるのが何より強いと思っっているんです。つまり会議室にこもってのクリエイティブでは発想がすごく小さいものになってしまふ。そうでなく、自由な発想で面白いことを思いつき、まずやってみる。ファンが増えた頃、ビジネスを考える。僕はビジネスが苦手なので、そこにパートナー、つまり画商ですよ、画商を加えるということをやっている。

でも、さらに国がなぜそこに加わってこないのか。例えば、かつて自動車などの関税率を諸外国と話し合ったように、映画なら、韓国も外国映画の上映に制限があったりするが、その規制開放の交渉などをしてほしい。

奥野 その交渉、交流こそが国や行政の仕事ですね。

手塚 コンテンツをつくるにしても、完成までのシステムをスムーズにするサポートがあり得ます。例えば映画、街なかでの撮影をどこまでサポートできるか。日本以外の国だと、大体フィルムコミッションがあり役所がサポートしてくれる。日本でも増えているが、まだ力が弱い。日本では何かやろうとしても非常にクレームを恐れる社会になっていて、スムーズに進まない。

秋元 例えばニューヨークで映画を撮るとき、ニューヨーク

ニコニコ動画

インターネット上で動画共有サイト。ニワンゴ提供で、〇六年サービス開始。愛称「ニコ動」。

Uストリーム

インターネットでのライブ映像共有サイト。米国で〇七年サービス開始。日本語版は一〇年から。

輸入規制

韓国ではスクリーンクォータ制として年間七十三日の韓国映画上映を義務づけると同時に、外国制作番組を六〇%以上放送してはならないという規制もある。外国映画の輸入制限は中国やインドなどにもある。

フィルムコミッション

映画等のロケ地誘致や撮影支援を行う公的機関。自治体や観光協会などが事務局を担当することが多い。

手塚 眞 てづか まこと
ヴァジュアリスト、ネオンテトラ代表取締役
1961年東京都生まれ。日本大学芸術学部中退。ヴァジュアリストとして先鋭的な創作活動を続ける。映像作品に『星くず兄弟の伝説』『妖怪天国』『白痴』(99年ベネチア国際映画祭デジタル・アワード受賞)。2005年『ブラック・ジャック』をアニメ映画化。06年宝塚歌劇団とともにミュージカル『リボンの騎士』プロデュース。著書『夢みるサイコ』『ヴァジュアル時代の発想法』『天才の息子』『父・手塚治虫の素顔』など。
<http://www.neontetra.co.jp/>



インテリがマンガを読む時代 天才クリエイターを育てる教育を

秋元 結局、何が根幹かという教育です。日本は例えれば野球選手でも何でも学歴を気にする。そうでなく、野球バカとか映画バカでいい。今は偏差値教育で平均化された人をつくっている。右へ倣えの大量生産時代ならいいが、すごく変革している時代に、みんなが同じ方向を向いていても新しいものは生まれにくい。日本は長所を伸ばす教育を子供の頃からしないとけない。そうすれば天才的な映画監督や天才的なマンガ家生まれるかもしれない。そこがまだ弱いんじゃないか。

奥野 僕の頃はマンガを読むのはダメな学生で、マルクスやサルトルを読んでいる人がインテリだったけど、今、マンガを読んでいる学生は本当にインテリなんです。

僕は実家が本屋だったので、ずっとマンガとつき合い続けた。今、大学にマンガ学部や学科ができたりしているが、それだけでマンガやアニメや日本のカルチャーを高めていくことになっているのかどうか。

手塚 単に大学をつくって学生を集めれば、自然に人が育つわけではない。やっぱり育てる環境——場所だけでなく、その人たちが育つのに必要なエネルギーを注ぎ込めるシステムづくり、そこに文化がわかる人間を入れて、一緒に育てていけるかどうかです。

秋元 大学にマンガ科が増えたのも、マンガ家を育てたということより、受験生に人気がありそうだから。むしろ

化を守り続けるからこそ、みんなが真似をする。

手塚 やっぱり西は、革新的な資質があると思うんです。よりエクストリームなものを求める。昔はよくアクション映画やホラー映画、極端な映画をつくると関西では受けると言われていたが、それを受け入れる土壌がある。東京は大もとにある徳川が非常に保守的だったから本当に石橋を叩くような感じ、その勢いの差はやはりある。

だから東京に出版社が多くても、マンガは関西でどつと勢いが出て、その中に手塚治虫もいて余計にそれが広まった。東京の出版社は売れるとわかってからやっとな手をつける。そういう順序だった。

秋元 東京は中心だと思っているので、最大公約数なんです。今、テレビというメディアがそう、最大公約数。だから確かに中心なんだけど、ネットで飛び出してきたものとかには対応できない。関西は逆に独自の文化を守り続ける。こういうのが多分、今日的なんだと思う。だからAKB48もテレビなどメジャーなメディアでなく秋葉原で延々公演を繰り返すという独自性、ぶれない点に勝機があった。特に関西はそこがすごいと思うんです。

奥野 ただ、江戸時代も最初に関西で井原西鶴や近松門左衛門などが出てきても、結局は江戸に蔦屋重三郎が現れプロデューサー制度で広めていった。人形浄瑠璃も関西で始まったが、派手な江戸歌舞伎としてマスカルチャー化していく。確かに何かを生み出す根は関西にあるが、それをマスカルチャー化するプロデューサー制度は江戸時代から東側にあった。

マンガが好きという大人が増えないとダメ。子供がマンガ家になると言う、大抵の親は食っていけないと止めるが、もつと飛び出していい。それを引き止めている日本の常識がある限り、これからの時代、世界と戦えない。日本人はアニメやアイドルというオタクでしようという見方。僕ら大人が、子供がアニメーターになりたいと言ったときに「いいね」と。アニメはすごいんだよ。みんなが大学を出て企業に就職するだけじゃなく、多様な職業がそれぞれ尊敬を集め、結果的に、アニメをやるうと思っただけで残念ながら才能がなかった。だけど私は今、経産省でアニメを一生懸命売り込む仕事をしているとなつたとき、初めて日本が世界にアニメを輸出できる。

マイペースでエクストリーム、 「生み出す力」が強い関西

奥野 さてクールカルチャーと関西の関係、結構そういう根を関西はつくってきたと思っっているんです。Jポップも根は関西フォークにあつたし、マンガも手塚治虫さんは関西でデビュー。これは近世もそうで、人形浄瑠璃とか浮世草子とか、いろんなものを関西はつくってきた。

秋元 それは関西のマイペースさだと思うんです。例えば吉本のお笑い——僕の妻は福井県出身なので子供の頃から吉本を見て育った。それがあるときから東京を中心に全国に広まり、今に関西弁が標準語になるんじゃないかという勢いで広がっている。これは関西のマイペースさ。つまりよそのものに憧れるのではなく自分たちの文

秋元 例えばロンドンで生まれたミュージカルも、オンブロードウェイになったときメジャーになる。でも、これからどちらが強いかと言えば、生んでいるところ。つまり今後は関西から直接世界に行く時代なので、やっぱり生んでいるところが強いと思うんです。

奥野 今はインターネット、あるいはデジタル技術で直接世界に発信しますからね。

クールジャパンについて語ってきましたが、特にアニメ、マンガ、アイドルは、近未来の日本の産業・文化として世界に発信される可能性が大きい。それを現実化するには、大人の理解、政府・行政・企業の既成概念と制度の改革、そして若者への新しい教育が必要です。外国に倣うのではなく、日本文化のなかにこそ「クール」の根がある。日本文化の再認識が大切であり、関西はそのための大きなポテンシャルを持っているということですね。日本はものづくり大国として国際的地位を築いたが、今やコンテンツ、つまり「もの語りづくり」で世界に評価されている。従来の「ものづくり」に「もの語りづくり」を加え、他のアジア諸国が真似のできない強みにしていく。それがクールジャパン、日本の針路だと思えます。本日はありがとうございました。■



関西フォーク
六〇年代後半から七〇年代初頭にかけて関西から生まれたフォークソング・ムーブメント。ザ・フォーク・クルセダーズ「帰ってきた酔っぱらい」などが先駆けとなる。

手塚治虫(1928～88)
漫画家・アニメーション作家。代表作に『鉄腕アトム』『火の鳥』『ブラック・ジャック』『ジャング大帝』など。

井原西鶴(1642～83)
江戸時代の浮世草子・人形浄瑠璃作者。代表作に『好色一代男』『日本永代蔵』『世間胸算用』など。

近松門左衛門
(1653～1725)
江戸時代の人形浄瑠璃・歌舞伎作者。代表作に『首根崎心中』『心中天網島』『冥途の飛脚』など。

蔦屋重三郎(1750～97)
江戸時代の版元。作家や絵師の才能を見抜く慧眼で、山東京伝らの黄表紙、洒落本、喜多川歌麿や東洲斎写楽の浮世絵などを世に出した。

〔大阪編〕

芸術文化を支える

大阪の「人」の力

川井郁子 ヴァイオリニスト／作曲家



かわい いくこ ヴァイオリニスト／作曲家
東京芸術大学卒、同大学院修了。大阪芸術大学(芸術学部)教授。ソリストとして活躍の他、TV「ミュージズの晩餐」(TX系)やラジオなどメディアでも活躍。「川井郁子 Mother Hand 基金」を設立、国連UNHCR協会評議員。08年NYカーネギーホール公演で米デビュー。今年アルバムデビュー10周年。10/7～11世界的バレエダンサー、フルフルジマトフとのかつてない音楽舞踏劇「COLD SLEEP」@新国立劇場、10/6アルバム『REBORN』発売、11月より全国ツアーを予定。
<http://www.ikukokawai.com/>

幼稚園の頃、家族旅行で初めて訪れた大阪は、ワクワクするような熱気に溢れていた。なにより街の人たちのテンポのいいお喋りが面白くて、楽しかった。通天閣など有名な観光スポットよりも、とにかく「人」。人のインパクトが強い。今、私は大阪の大学に月二回教えに通っているが、その第一印象は変わっていない。

以前に比べると最近では、街が洗練されてきた。中之島あたりなど特にそう。すごく洗練されたものと庶民性、両極の相反するものがたくさん同居している。先端のファッションに身を包んだ美しい女性が、口を開くととても面白いか。街人も意外性がいっぱい詰まっています、奥が深い。全国各地でコンサートを開いているが、大阪のお客さまの

きる環境——アーティストが仕事をしていける場がなければ、若手は育たない。

人が人をつくる。相手を楽しませるサービス精神が旺盛で、ちよっとお節介。会話が面白く、フランクな雰囲気のおかげで

反応は群を抜いてダイレクト。「どう楽しませてもらえるの」という期待感が舞台上まで伝わってくる。演奏に対しても、周りの反応を気にせず、自分が良いと思うとすぐに拍手をしてくれるから、どの曲が好きかすごくわかりやすい。海外のコンサートではそういう反応も多いけど、日本ではお客さまのほうも緊張しているのか、反応が均一。終了後のサイン会などでお会いするまで、どの曲が良かったのか、どう感じてくれたのか、わからない。演奏中にわかる大阪では、私の気持ちも盛り上がる。奏者にとっては最高のお客さまだ。

オーケストラとの共演も大阪は、やりやすい。「みんなの一つの音楽をつくろう」というノリだから、ヨソ者が力を試されてるようなプレッシャーを感じなくて済む。私は結構心配性だけど、大阪に住めば楽観的になれるかもしれない。人と人の垣根のなさが嬉しい。

ただ、残念ながら音楽をやっている者にとっては、東京の方が「場」が多く、活動しやすい。芸術文化を育むには、夢を持てる環境が大事。憧れの人の活躍を身近に見ることができ、エネルギーをもらえる街・大阪。遡れば江戸時代、大坂は人形浄瑠璃はじめ上方文化を花開かせた。文化を育む土壌として、「人」の力は今もある。次はアーティストが活躍できる「場」があれば、大阪はもっと素敵な街になる。 **躍**



関西文化の 底力を検証する

「クールジャパン」として注目を集める、
日本のマンガ・アニメなどポップカルチャーや日本料理。
それら世界に誇る日本文化の多くは、関西の地に芽吹き、
地域の特徴を生かしながら発展してきた。
「クールジャパン」の魅力と、それを支えてきた文化力を探るために、
奈良、京都、滋賀、兵庫の各地を訪ねてみた。

「南都楽所」の夏季雅楽・神楽講習会最終日、春日大社本殿に奉納する神楽舞「浦安の舞」を演じるために待機する巫女（舞姫）装束の受講生たち

古代ユーラシア伝来の熟成された楽と舞

中元万燈籠の夕べ、春日大社本殿下の直会殿に坐した「南都楽所」の楽人たちが筆箒と高麗笛、三ツノ鼓と太鼓、鉦鼓による、雅楽独特の厳かでゆったりとした調べを奏で始めた。ほどなく前の板の間に、鼠の模様を刺繍した黄色い装束と緑の甲を被った四人の舞人が現れて、舞楽「林歌」を演じていく。雅楽奉納のひとつである。

雅楽は、はるか昔、仏教の伝来や遣隋使、遣唐使などに伴って日本に伝わった、古代中国や朝鮮半島、渤海国、さらには東南アジアやインド、ペルシアなどの音楽と舞に由来する、と南都楽所の楽人で春日大社禰宜の藤岡信宏さんは言う。既に奈良時代、東大寺大仏開眼供養会に奉納の記録があるが、「おそらく当時の楽人や舞人は、それぞれの国から渡来して、楽器も旋律も国や地域ごとに異なっていたと思われます」。藤岡さんによれば、平安時代、それら出自の異なる雅楽が整理統合され、中国・インド・ベトナム系の「唐楽」と、朝鮮半島・渤海国系の「高麗楽」に編成された。なお、器楽演奏だけの雅楽を「管絃」といい、舞踊を伴う雅楽を「舞楽」という。そうして平安時代中期の一〇〇〇年頃、唐楽を行う人々によって、奈良に南都楽所が置かれ、京都には宮中専属の「大内楽所」、大阪には四天王寺専属の「天王寺

楽所」が置かれた。「奈良には東大寺や興福寺、薬師寺、唐招提寺や春日大社などがあり、それら寺社のお祭りには舞楽が必須のものでした」と藤岡さん。以来、それら寺社の支援を受けながら、南都楽所に属す幾つもの楽家（楽人の家系）では、幾百年の歳月、親から子へ、子から孫へと雅楽の技を磨き、伝え続けてきた。

伝統を絶やさず受け継ぐ「見えない」パワー

明治維新直後、南都楽所に転機が訪れた。政府の命で、京都、奈良、大阪三楽所の楽家、楽人がすべて東京に招集されたのである。

しかし、奈良では、つながりの深いお寺や神社への雅楽奉納を使命と感じる楽人の幾人かが地元に残り、弟子や支援者とともに雅楽の活動や後継者の育成に取り組んだ。「これまで千年も続けてきた、神社のお祭りやお寺の法要で演じてきた雅楽を、『もうできません』では、神さまや仏さまに申し訳ない。そして、自分の代で奈良を出るのをご先祖さまにも申し訳ないという気持ちも働いていたのかもしれない」（藤岡さん）



奈良

雅楽、世界最古の管絃楽を伝える持続力

- ① 龍笛(りゅうてき)を奏でる南都楽所の藤岡信宏さん
- ② 春日大社本殿に奉納される神楽舞「浦安の舞」
- ③④ 中元万燈籠の夕べ、春日大社本殿下の直会殿で「林歌」(りんが)を演奏する南都楽所の楽人たちと演じる舞人たち





京都

寿司よりクールな京懐石、日本食の極みと伝統

四季折々の「季節」を味わう京料理

旨い昆布出汁と、魚や野菜など旬の素材を生かしたさまざまな料理を、一品ごとに味のある陶磁器や漆器に盛りつけ、目に、舌に、そして心に感動と至福のひとときをもたらしてくれるのが「京懐石」である。

ヘルシーフードへの世界的な関心の高まりのなかで、クールな「Sushi」は欧米の人々の身近なメニューとして定着した。さらに近年、懐石料理が、日本料理の極み、芸術とさえ評され、大きな注目を集めている。

世界の人々を惹きつける京懐石など京料理の精髓は、いかに季節感溢れる素材を使って季節を表現し、季節を味わうかだ、と言うのは、京都料理組合組合長で、安土桃山期創業の料亭「山ばな平八茶屋」二十代当主・園部平八さんだ。「例えば、うちの若狭懐石では、秋、杉の薄板にぐじ（甘鯛）を載せ、茸と松茸を加えてあぶる『ぐじの杉板焼き』をお出ししています」

このような京料理の基本が形成されたのは、園部さんによれば、江戸時代中期以降だ。それまで京都には、茶道文化から生まれた「懐石料理」、寺院文化から生まれた「精進料理」、公家文化から生まれた「有職料理」、周辺の河川や琵琶湖の食材を使った「川魚料理」、町家の惣菜を基本とする「おばんざい」の五系統があった。そ

明治以降、雅楽は楽家以外の誰でも演じることができるようになり、奈良では雅楽を習い始める人が増えていった。その過程で春日大社を中心に残った楽人と新たな人たちで形成されたのが、現「南都楽所」である。

南都楽所では、現在、春日大社を中心に檀原神宮、興福寺、法隆寺などの祭礼や法要で雅楽を奉納するだけでなく、国内外での公演、普及活動に尽力。欧州や中国などに出かけることも少なくない。とりわけ唐楽のルーツである中国には幾度も「里帰り」し、敦煌の莫高窟前で奉納公演をしたこともある。

今、雅楽は世界で日本にしか残っていないが、中国公演では仏教僧侶も大勢詰めかけ、感慨深げに鑑賞されていた、と藤岡さんは言う。欧州では洋楽にないユニークな旋律やメロディラインを興味深く味わう観客も多い、とか。もちろん、後進の指導、育成にも積極的に週末や夏季講習会にはお年寄りから小学生に至るまで、男女とも多くの受講生が稽古に励んでいる。

「雅楽は本来、純粹な気持ちで神さまや仏さまに奉納するもの。奈良の人はあまり構えず、熱く燃えないけれど、粘り強く続ける『見えない』パワーを持っています」。奈良の地で雅楽が途絶えることなく、伝えられてきた背景について、藤岡さんはそう述べた。



- ①南都楽所の夏季雅楽・神楽講習会で鳳笙(ほうしょう)の稽古をする受講生たち
- ②同じ講習会で篳篥(ひちりき)の稽古をする受講生たち
- ③雅楽の中でも有名な「越殿楽」の楽譜





京都

- ① 八坂神社の南、高台寺道につながる石塀小路には料亭や旅館が幾つも軒を連ねている
- ② お茶屋や料理屋が集まる祇園・花見小路では、日暮れ時、お座敷に通う舞妓さんを一目見ようと大勢の外国人観光客が押しかける
- ③ 山ばな平八茶屋の庭園

- ④ 名物料理「若狭懐石」に出す「ぐじ」をさばく園部さん
- ⑤ 「ぐじの杉板焼き」などが並ぶ若狭懐石 (提供:山ばな平八茶屋)
- ⑥ 高野川河畔に建つ、大正期の数寄屋造りの座敷 (提供:山ばな平八茶屋)

望な若手シェフを京都の料理屋に招いて日本料理の研修と交流を行ったり、海外で現地のシェフや料理関係者に日本料理のレクチャーや実演を披露したり、京都市内の小学校で食育活動に携わるなど、多彩な事業を展開していった。

初代理事長を務めた園部さんによれば、当初、懐石料理の世界標準化を試みたが、京懐石は京都の気候風土、生活文化のなかでこそ、との思いがさらに強くなったという。「昆布出汁は京都の水が軟水なので旨味が出ます。一方、東京は硬水のため昆布の旨味が出ず、鰹出汁に頼り、鰹の臭みを消すために醤油をたっぷりかぶせます。いかにグローバル化といっても、やはり、京料理は京都で、です」(園部さん)

そのような地域の特性、素材をいかに生かすかが、京料理の持ち味だ。実際、京都で研鑽を積んだ海外のシェフたちは京の料理人たちの料理への想いから季節ごとの素材の吟味、扱い方、調理の仕方、盛りつけ方まで学び、大きな刺激と深い感動を得て帰国するという。世界的なレストランガイドが京都の料理、料亭を高く評価するのも当然かもしれない。

京都の料理屋は、どこも店の伝統を守りながら、時代の変化を乗り越える新しい料理を工夫して、駅伝ランナーのように、ひたすら次代へとつないできた、と園部さんは力を込める。

そのような名うての京の料理人たちが力を合わせ、日本料理の発展と世界的な普及、理解促進のために、二〇〇四年、「日本料理アカデミー」を設立。欧米の有



れらが独自性を高め、あるいは融合しながら、季節感に富む多様、多彩な京料理の世界を形づくってきた。

出汁の昆布は、北前船が松前(北海道)から運んだもの。野菜は地元で丹精込めて栽培されてきた「京野菜」。魚は、海から遠いため、川魚か、若狭で揚がった「ひと塩物」。江戸時代、京で唯一手に入った「活け物」は、樽に海水を張って運ばれた淡路の鱧と明石の蛸でした、と園部さんは言う。

工夫を重ねて次代につなぎ、世界に伝える

信楽

土と炎の芸術、六古窯「信楽」の魅力

「古信楽」の素朴な生活雑器が茶人を魅了

地元で採れる良質の陶土を轆轤ろくろや手捻りで、大小、さまざまな器形に成形し、穴窯や登り窯で幾晩も焼きあげて、独特の赤味（火色）のある、温かですっきりと手になじむ味わい深い焼き物をつくり続けてきたのが、六古窯の一つ、鎌倉時代からの歴史と伝統を持つ「信楽」だ。

信楽陶芸作家協会会長で、祖父以来の「みはる窯」を主宰する神崎継春さんによれば、信楽の陶土は、もとは古琵琶湖の湖底に堆積した粘り強い山土で、ひび割れしにくく、大きな器も小さな器も思いのままに成形できる。地元の陶工たちがそんな優れた陶土の特徴を引き出しながら成形し、幾日も窯焚かまいたきして、幾世代にもわたって作りあげてきた土と炎の芸術が信楽焼（特に江戸時代以前のもの）を「古信楽」と呼ぶのである。

鎌倉から室町時代にかけて、信楽の里は、山の斜面を掘り込んで築いた「穴窯」で壺や甕、大甕、すり鉢など、周辺地域向けの生活雑器を焼きながら発展した。そして

安土桃山時代。千利休など京の都に集まる茶人たちに、信楽焼の、明るく大らかで純朴な風合いの良さを見出され、「わびさび」の心を体現する「茶陶」の産地として高く評価されることになった。「茶人大名が最初から茶陶を焼かせた伊賀焼（古伊賀）」と違い、古信楽は茶人の見立てによって日常的な生活雑器が水指や花入などの茶陶となっていたんです」（神崎さん）

しかし利休らが絶賛した、穴窯で焼かれ釉薬を使わず灰かぶりの自然釉を持ち味とする焼締め技法の古信楽は、江戸前期、茶陶が衰えるなかで、新たに導入された巨大な「登り窯」で焼かれる釉薬のかかった茶壺など、大量生産型の生活雑器へと代替わりして、歴史の表舞台から消え去った。

「穴窯」の窯焚に海外の注目が集まる

代わって江戸中期、宇治から江戸へ運ばれる茶壺生産で伸びた信楽は、明治中期、地元で開発された「なまこ釉」を使った藍色の「火鉢」で以後、全国シェアの九割前後を占めるほどになった。戦後の高度成長期以降は、火鉢に代わって植木鉢や傘立、ガーデン用の陶製テーブルセットなど、時代のニーズに合わせた製品が、あるいはユーモラスな狸が日本中の家庭に広まっていった。

一方、釉薬を使った生活雑器生産を主力とする陶器産

業とは距離を置く作家志向の強い陶芸家たちが、江戸初期に消滅した穴窯復興に挑戦。焼締め技法による自然釉の、利休好みの古信楽の伝統を踏まえた風情ある壺や皿、茶碗や水指、花入などの創作に励んでいた。その一人、神崎さんは「窯焚では穴窯の中の温度は一二〇〇℃にも達する。炎が踊り、それは美しいものです」と目を細める。現在、信楽に穴窯は三十数基と増え、日本の陶芸界で、信楽は再び優れた茶陶のメッカとしての地位と評価を固めることになった。

○五年、カナダ人監督が製作したカナダ・日本合同映画『窯焚KAMATAKI』は、信楽が舞台。穴窯での窯焚を題材に、芸術へのストイックなこだわりと日本の美意識を世界に発信し、モントリオール世界映画祭史上初の五冠ほか、ベルリン国際映画祭でも審査員特別賞を受賞するなど高い評価を受けた。このように、近年、信楽への興味、関心は海外で急速に高まってきた。欧米ばかりか、韓国、台湾、香港、さらには東南アジアからの研修生が毎年、信楽高原にある「陶芸の森」で研修を受け、自ら穴窯での窯焚実習に励んでいる。

型にはまった機能性と様式美を追求する欧米などの陶磁器と違い、穴窯で生まれる信楽焼は、器の形、色、風合い、手触り、何を取っても自由で明るく、土と炎と人との共生、融合を象徴するような趣きがある、と言えるかもしれない。



信楽で最初に狸の焼き物を創ったといわれる窯元「狸庵」の狸



- ④ 信楽のまちの一角に残る、昭和30年代まで使用された「登り窯」跡
- ⑤ 神崎さんのみはる窯



信楽

- ① 轆轤上の陶土が、手指の動きに伴ってさまざまな器に成形されていく
- ② 「信楽」独特の風情ある花入など、神崎さんの作品が並ぶ展示室
- ③ 自ら築いた「穴窯」で四昼夜窯焚を続ける神崎さん





宝塚

非日常、非現実を演じるタカラヅカの発信力

①宝塚歌劇オフィシャルショップ「キャトルレーヴ」内の棚を飾るタカラジェンヌたちのプロマイド
②宝塚大劇場のエンタランスで開場を待つ大勢のファン ③宝塚歌劇団理事長・小林公一さん
④宝塚歌劇の最後を彩る絢爛豪華なフィナーレ ©宝塚歌劇団

すべての観客を楽しませる「国民劇」をめざして

二千五百人の大観衆が注視する宝塚大劇場の大舞台。華麗なコスチュームに身を包み、古今東西の愛とロマンの物語の主役を演じる男役トップスターと娘役トップを中心に、多数の男役・娘役の女優たちが絢爛豪華な芝居と歌のミュージカル絵巻を繰り広げる。

「宝塚歌劇には、老若男女すべてのお客さまに喜び、楽しんでいただける健全な国民劇を創ろうという、創始者・小林一三の遠大な野望が原点にありました」と語るのは、宝塚歌劇団理事長の小林公一さんだ。

宝塚歌劇の歴史は一九一四年、宝塚歌劇団と宝塚音楽学校の前身、十六人から成る「宝塚唱歌隊」の『ドンブラコ』上演から始まった。やがて、低料金で誰もが楽しめる「国民劇」実現のため、小林一三は二四年、それまでの宝塚大劇場を四千人収容に増設した。当時、阪急梅田―宝塚間の電車は一両か二両。一両で四千人なら、八両編成の電車が走る現代に換算すると三万二千人規模の劇場になります、と小林さんは笑う。

その「無謀」な企てに命を吹き込んだといわれるのが、二七年上演の、大階段にライندگانスという宝塚歌劇の原型となった初レビュー『モン・パリ』だった。全十六場、幕間なしのノンストップ・レビューで花のパリと人々の暮らしを表現。評判が評判を呼んで大ヒットした。「このレビューが当たらなかつたら、今の宝塚歌劇もなかったでしょうね」（小林さん）

なお、今やクールジャパンとして世界を席巻する日本のマンガ・アニメのパイオニア・手塚治虫は、幼少期、宝塚に暮らし、宝塚歌劇のファンだった。王子の格好をして活躍する王女サファイアを描いた『リボンの騎士』は、宝塚歌劇の影響で生まれたといわれている。

「宝塚」から世界へオリジナルレビューを発信

戦後、宝塚歌劇は、五一年に上演し三カ月のロングラン公演となった中国史劇のミュージカル大作『虞美人』の成功、さらにオイルショック直後の七四年に上演した、

池田理代子原作『ベルサイユのばら』の大ヒットなどで、名実ともに日本を代表する国民劇の地歩を固めた。

なぜ、宝塚歌劇がこれほど観客の心を惹きつけてきたのか。小林さんは、一貫して女性だけのレビューを追求してきたことが大きな要因の一つだと言う。「舞台というのは非現実な

世界です。その舞台を非現実的にすべて女性が演じることで、たとえ外国物のミュージカルでも、お客さまは違和感なく物語世界にすっと入り込めるのです」

街の 灯り 物語

灯り——それは
そこに暮らしがある証
さまざまなかたちで描かれ
物語が紡がれている証
迎えてくれる灯り
見送ってくれる灯り
そして見守ってくれる灯り
街それぞれに灯りがあり
人それぞれに
心に残る灯りがある
その一つの物語



①ゲート前から宝塚大劇場の建物を望む
②外国人も訪れる有楽町の東京宝塚劇場

もう一つ、「清く正しく美しく」をモットーとする宝塚歌劇団の本拠地を、三都（京都、大阪、神戸）ではなく、「大正ロマン」と「昭和モダン」のなかで発展した「宝塚」に置いていることも、タカラヅカの魅力が百年近く保ち続けている要素かもしれない。新作や再演以外の海外作品でも、常にタカラヅカのオリジナル作品に再構成・演出して宝塚大劇場で初演し、東京へ。以後、「組」を変え、アレンジを加えて全国ツアーへ、さらには欧米やアジアでの海外公演へと展開していく。

小林さんによれば、韓国などアジアの観客はまるでコンサート会場のような熱狂的歓声でタカラジェンヌの

テージを迎え、本拠地・宝塚大劇場まで観劇に来るファンも増えてきた。一方、欧米の観客は当初、「女性だけのミュージカル」という点に戸惑いを見せるが、ひとたび華麗な愛とロマンスの舞台に接すると、違和感なく、その世界に浸り、楽しんでいくとか。

「日本ばかりか、世界中の方々が宝塚歌劇をご覧になり、日常から解放されて元気になっていただければ嬉しいですね」と小林さんは結んだ。

● 関西発の文化が、独自性と質の高さで世界の注目を集める——千年以上も前に渡来した文化を継ぎ磨き、世界で唯一となった今、既に途絶えたもの国に里帰り公演を行っている奈良の「雅楽」。長い都の伝統のなかで公家や寺院、茶人や町家の料理を洗練させ、世界のグルメリ「芸術」と言わしめた「京懐石」。安土桃山期、千利休を驚かす茶陶を焼き、戦後、昔日の「穴窯」を復興して、陶芸界に新たな活力を与えてきた「信楽焼」。大正ロマンと昭和モダンの薫り高い地で生まれ育ち、日本から世界へ独自のレビュー文化を発信してきた「宝塚歌劇」。地域に根づき、国境を超えて活躍する関西文化の今後に注目したい。 **【 翠 】**



宝塚市立手塚治虫記念館前に建つ「火の鳥」像

初

めて灯りを意識したのは、リュックを背負って一人、ヨーロッパを歩いたときだった。大学卒業間近の冬、イギリスの田舎町で、夜道をぼつりぼつりと照らして続くオレンジ色の街灯に心を動かされた。異国で一人だったからか、暗闇の中で小さくともされた灯りに、体温のような温かさを感じた。

大都市は不夜城。すべての闇をなくしてしまおう勢いで、真夜中でも輝いている。日本もそう。街じゅうを白く照らし出すことが、高度経済成長の証明だった。そういう明るさに慣れていたから、仄暗い街灯に却って心惹かれたのだろう。

一方で、闇の存在を教えてくれるのもまた、灯りの存在だ。光と闇の両面を知ること——それは私のものの見方、考え方の根幹といえるかもしれない。物事を一方向からでなく多様な方向から見る。昔からあまのじゃくな面があった私は、みんなが「こつちから見るといいよ」と

真山仁 作家

人の本質・心の内を、
夜の街の情景で描きたい

言うのと反対から見るといいよ」だった。それは大人になっても変わらず、小説家を志したきつかけの一つでもある。同じ場所でも、明るい昼間と真っ暗な夜では全く違って見えるように、人間にも、表と裏、さまざまな顔がある。新聞が伝えるのが光の部

分なら、小説が描き出すのは影や闇。それは、より人間の本質に迫るものといえる。

外国映画などを見ていて思うのは、夜の街を描くのがうまい人は人間の内面を描くのもうまい。小説のなかで人間の心理を描くときにも、夜の闇や、そこにともる灯りは重要な要素だ。心が癒されるような仄かな灯りもあれば、見たくなかったものまで見せてしまう明るすぎる照明もある。私も多分、夜の場面に自分のメッセージを託すだろう。小説家として経験を積むなかで、灯りにはもっと重要な役割を担ってもらわないといけないし、もっと闇を物語に織り込んでいけるようになりたい。

もともと日本には、独特な灯りの文化があった。金屏風が薄暗がりの中でしつとりと輝く美しさや、薪能で面の陰影を照らし出す篝火かがりび。それらはいずれも、闇を生かす灯りの作法。そういう灯りの使い方は忘れたくない。

秋——空気が澄んでいく秋から冬にかけては、事務所から近い六甲の夜景も、より鮮明にくつきりと見えてくる。日が短くなるこの季節、多くの人のにとっては次第に光が失われていくように感じる時期かもしれない。けれど私にとっては、夜ごと灯りが近づく季節。澄んだ夜の空気の中で夜景が美しく輝きを増してくる、そんな楽しみが近づく季節だ。

窓

街の

灯り

物語



まやま じん 作家
1962年大阪市生まれ。同志社大学法学部政治学科卒。87年中部読売新聞(現・読売新聞中部本社)入社。89年退社、フリーライターを経て、2004年『ハゲタカ』でデビュー。同作はドラマ化、映画化され大反響を呼ぶ。経済・金融のほか、メディア、エネルギー問題などさまざまなテーマで作品を発表。他の著書『レッドゾーン』『虚像(メディア)の砦』『パイアウト』『プライド』『マグマ』『ペイジ』など。
<http://www.mayamajin.jp>

作家

柴崎友香



飛行機の窓から緩やかなカーブを描く海岸線が見えた
と思ったら、あっという間に低い山並みと草原が連なる
緑の大地が広がった。初めて見る北海道は、本州とは違
う柔らかな繊細な緑色で美しかった。空港を出ると、猛
暑日の続く大阪からは予想以上の涼しい風に包まれた。
ジャンボタクシーのベテラン女性運転手さんの滑らか
な解説を聞き、牧場の牛や馬を眺めながら釧路市内へ。
距離感がわからなくなるほどひたすらまっすぐな湿原道
路を走る。右も左も、草原。とっていると、運転手さ
んが「このあたりは全部湿原です。ヤチマナコという沼
のような穴があって、昔は牛や馬がはまることもありま
した。」「ヤチマナコ」？「湿原」がどういふ場所なのか、
実感するのはもう少しあとのことになる。

資源を生み生命を育む湿原

——炭鉱と湿原の釧路に行く



19,357haと日本最大の広さを持つ釧路湿原。太古の海が現在の姿となったのは約3000年前。地殻運動により地盤は西高東低で、低くなった東側には海跡湖が残り、釧路川が大きく蛇行しながら流れている。圧倒的な平原の広がり、ほとんど手つかずで残された自然は、この湿原に流れてきた悠久の時を感じさせる。ここはまた多様な生物を育む場所でもあり、1980年日本で最初にラムサール条約登録湿地となった。

▲アイヌ語で「沼のところ」という意味を持つ塘路湖は、太古、海が後退する過程で誕生した海跡湖。レイクサイドとうろの土佐良範さんとカヌーに乗る

▲湧き水。雨や雪が数十年の時を経て湧き出て、塘路湖に注いでいる

ゆっくりカヌーを漕いで戻りながら、土佐さんに、今年には異常に暑い日が続いている、湖の景色自体は変わらないうえに周囲から泥が流れ込んで水深は1mほど浅くなった、など伺う。減っていく湿原を、土佐さんは未来に残したいという。

気温が低く農地にされずに残っていた湿原を調査し、一九八〇年にラムサール条約の指定にこぎつけたのは、地元住民を中心とした活動と努力だった。国立公園になったのはその七年後のことだ。釧路の自然は地元住民が主導して守ってきたのである。

斉藤さんの案内で、釧路川を上流へ。昔は水害の防止や農地開発のために川の流れを直線に変えてきたが、泥を運び込んで湿原が乾燥化してしまっているので、元の蛇行した川に戻す事業が進められている。

植物が分解されずに堆積した泥炭層

という。よく見ると、砂地には幾筋もの小さな水の流れがある。一か所ではなく、浜全体から水が浸みだしている。触ってみると、冷たい。湖の温度と全然違う。しかし、冬に湖が凍ってしまったも、逆に湧き水は凍らないというから不思議だ。昔はこのあたりに住んでいた人たちの貴重な水源だったし、今も動物たちが飲みにくるそう。周囲にはシカの足跡があった。数十年前に降った雨や雪が、今日の前で湧き出ている。自然の複雑で精巧なしくみに感動する。

到着した場所は、塘路湖畔。ここからカヌーで、塘路湖を縦断する。案内してくださるのは、釧路国際ウエッジランドセンターの斉藤さんとレイクサイドとうろの土佐さん。土佐さんは、代々この土地に住むアイヌの方で、塘路湖周辺の自然を守るために早くから尽力されてきた。カヌーが湖面に浮かぶと、土佐さんの舵取りですうっと進み出した。大きいトンボ、細いトンボが飛び交う中、静かな湖面に浮かぶ水草は菱。忍者が撒く菱の実だが、水草だとは知らなかった。栗のような味でおいしい、昔はアイヌの人たちの冬の間の貴重な保存食だった。秋の収穫の時期に合わせたお祭りも、「昔は神さまに収穫を伝える儀式だったのが、今はお祭りになっている」と土佐さん。菱は湖底から生え、根は三mもある。

見渡す限りの広い湖面をひたすら進むと、オジロワシの姿が。双眼鏡を覗いてみると、確かに白い羽根が目立つ。そして、大きい！

対岸の小さな浜辺に降りる。ここから水が湧いている

塘路の湧き水





93年に釧路市でラムサール条約締約国会議が開かれたのを機に、地方の立場で湿地保全の国際協力を進めるための活動拠点として、釧路市はじめ関係市町村などにより95年「釧路国際ウェットランドセンター (KIWC)」が設立された。KIWC研究員の齊藤さゆりさんに案内してもらい、釧路川の蛇行復元現場に行く。



▲釧路川の蛇行復元現場にて



長靴に軍手で獣道を進む。棘のあるイラクサを掻き分けていく齊藤さんが頼もしい。周囲を見渡す余裕ができると、あまりに美しい風景に息を飲んだ。ミズナラやダケカンバなど落葉樹の薄い葉を通して差す光、背の高さほどに伸びたシダはまるで古代の森のようだ。釧路の短い夏の束の間の緑。冬には葉も草もすべて枯れてしまつてどこまでも見通せる景色に一変するようだ。足下の土はふわふわしている。湿原とは、植物が枯れても低温のため腐らずに長い年月をかけて堆積したスポンジ状の泥炭層から成る土地。豊かな養分を持ち、多様な生物の育つ場所となってきた。

すぐそばのせせらぎが、事業によって掘られた場所。少しずつ侵食が進み、弧の外側の崖が崩れてきている。落ちないように注意しながら、直線の川との合流地点へ。林を抜け、急に視界が開ける。深い青色の空が、川面に映って輝いていた。お盆が過ぎれば釧路の夏は終わる。空はもう秋の雲だった。

国内唯一・最後の坑内掘り炭鉱

翌朝は釧路コールマインへ。

石炭も炭鉱も過去の物というイメージを持っている人は多いが、発電や製鉄に石炭は不可欠であり、日本は現在でも世界一の石炭輸入国である。輸入に頼り切らず、また炭鉱の技術を失わないために、閉山した太平洋炭礦のあとを受け、二〇〇一年に設立されたのが釧路コール



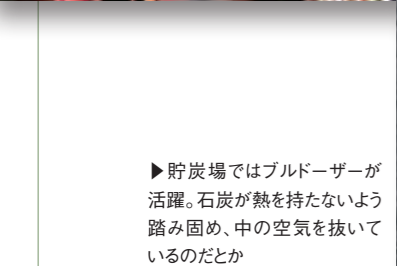
▼泥炭から石炭へ、4500万年
前の地層が美しい縞模様を見
せていた。黒い部分が石炭だ



◀切羽(きりは)にて。
巨大なドラムカッター
が唸りを上げていた



釧路コールマイン。90年にわたる釧路の採炭の歴史に幕を下ろしてはならないと地元経済界が力を結集、太平洋炭礦から採炭事業を引き継ぎ、2001年に設立。採炭量や社員数は1/3に縮小したが、「掘り出せ、釧路の海底チカラ」を合い言葉に、釧路市沖の海底の炭層で採炭を続ける、日本唯一の坑内掘り炭鉱だ。市原義久さんの先導で、採炭現場に入らせてもらった。



▶貯炭場ではブルドーザーが
活躍。石炭が熱を持たないよう
踏み固め、中の空気を抜いて
いるのだとか



◀坑内に設けられた休憩所



▲坑内で使う資材を運搬する台車(トロック)



マインである。

一時は、海外の石炭に比べて三倍近い価格差があった国産の石炭だが、海外炭が値上がりする一方、コスト削減が進み、現在はその差は縮まっている。

今や国内唯一、最後の坑内掘りとなったこの炭鉱は、釧路市郊外の沖合2km以上にわたって海底下に広がっており、傾斜が緩いため大型の機械で掘削が可能だ。事前に綿密な地質調査をし、できるだけ近くて狭い範囲で効率のよい採掘をめざしている。また、今でも事故が多い中国やベトナムの研修生を受け入れて技術や安全の指導をしていて、この日もベトナムの研修生が発前の安全確認の点呼を取っていた。

保安生産部長の市原さんの先導で、作業服に安全靴、ヘルメットにはヘッドライトの完全装備で人車に乗り込む。傾斜したトンネルを一気に降下する。「海岸線」の表示を越えさらに五分ほど下り、そこからは徒歩で現場へ向かう。海面下約二二〇m。冷たい風が吹いてくる。大抵の炭坑は掘り進むほど温度が上がるが、ここはなぜか昔から涼しいらしい。真冬は厳しい寒さになる。

鋼柱に支えられ多数のケーブルが這うトンネルをひたすら歩く。上り坂が続き、だんだんと坑道も狭く足場も悪くなるので、息が上がる。機械類はすべて安全対策のため鉄板で頑丈に覆われているため大きく、その分坑道は狭い。ヘッドライトの明かりだけを頼りにようやくたどり着いた掘削現場の先端は、想像を遙かに超える迫力だった。

四五〇〇万年の時を経て、植物から石炭へ

暗闇の中に、漆黒の岩盤が光っている。海底の地層の縞模様が、巨大な機械に削られて頭わになつていた。四五〇〇万年の時を経て、湿原に積み重なった泥炭層がこの地底で黒い石炭となる——説明を聞きながら、そういえば石炭は植物起源だったことを思い出した。太古の植物が泥炭となって湿原に堆積し、のちに大規模な石炭層になるのだと聞いたことがある。途方もない時間をかけて生み出された資源を、大勢の人が膨大な労力をかけて着実に掘り進んでいた。

地上に戻り、釧路港の貯炭場へ。文字通り「山」のように石炭が積み上げられている。拾い上げてみると、艶があつて軽い。案内してくれた釧路コールマインの水石さんによれば、時には化石化した植物の形が見られるそうだ。岸壁から船に積み入れ、全国へ運ばれる。普段当たり前のように使っている電力や鉄の源となる石炭が生み出される場所を見ることができたのは、わたしの人生にとって忘れられない経験となるだろう。

生物多様性の宝庫

環境省の釧路湿原自然保護官事務所へ。自然保護官(レンジャー)の竹中さんに釧路湿原の概要や世界各国で見直されている湿原の重要性を解説してもらおう。生物多様

▶野外ゲージでリハビリ中のオジロワシ。事故の原因は感電、交通事故、鉛の銃弾が残ったシカ肉を食べたことによる鉛中毒などだとか



自然環境の保全整備や野生生物の保護管理を行う環境省 釧路湿原自然保護官事務所で、自然保護官(レンジャー)の竹中康進さんに湿原の話聞く(写真右)。スポンジ状の泥炭層から成る釧路湿原では、シマフクロウやタンチョウなど鳥類約170種、キタキツネやエゾシカなど哺乳類30種、イトウなど魚類38種、氷河期からの生き残りのキタサンショウウオなど両生・は虫類9種、トンボなど昆虫約1130種など多彩な生態系を確認している。



◀▲外来種のウチダザリガニを捕獲。ニジマスの餌として北米から輸入し摩周湖に放流したものが増殖したそうで、前日にしかけた罠には驚くほどたくさんかかっていた。ヨーロッパでは高級食材らしい



性。その言葉どおり、湿原の生態系は驚くほどの多様性に満ちている。

事務所が置かれている野生生物保護センターでは傷ついた鳥たちの保護も行っている。普段はモニターでしか見ることができない鳥舎を見学させてもらう。翼を伸ばすと二mにもなるシマフクロウやオジロワシが合計十羽以上いる。獣医師が常駐し、傷ついた鳥の治療やリハビリを経て、可能なものは自然に帰す。

一方で湿原本来の生態系を維持するために、外来種であるウチダザリガニの増殖に歯止めをかけようと、罠をしかけて捕獲する。これも保護官たちの仕事だそう。

ミズナラの林を抜けて温根内ビジターセンターへ。豊かな大自然に見える森だが、ほとんどが一度伐採され放置されたところに自生した木々らしい。確かに大木は少ない。自然の状態に近づけるため、どのくらい人の手を入れるか試行錯誤しつつ、自然の状態に近づける事業も続いている。

指導員の若山さんに案内をお願いして、湿原を通る木道を歩く。一見すると草地だが、水を含んだ湿地を人は歩けない。そこで貴重な自然を観察するため木道を設置している。木道から両側を見ると、確かにヨシやスゲの根元には水が溜まっている。木道脇の水たまりのようなぽっかり空いたところに長い棒を差し込むと、二m以上すとんと入ってしまう。これが「ヤチマナコ」(谷地眼)で、非常に危険。

「黒いダイヤ」石炭が山のように積み上げられた貯炭場。「掘り出した石炭に、化石化した植物の形が見えることもある」と、水石豊さん



湿原内を歩いて、身近に生態を観察できる「温根内木道」。歩いていくと、クサフジやドクゼリなど小さな可憐な花が咲いている。釧路湿原の植物は約600種。どこを指してもすぐに毒の有無や名前の由来まで答えてくれる温根内ビジターセンターの若山公一さん(写真右下)のおかげで、釧路の植物を多く知ることができた。ヨシ・スゲ湿原を抜けると、大草原のようなミズゴケ湿原が広がる。



▲ヤチマナコ。湿原にある落とし穴のような池。水たまりのように見えて、実は2m以上。深いものでは4mもある

原子力 高レベル放射性廃棄物、 地層処分への課題

坂井悦郎 東京工業大学大学院理工学研究科教授



地球温暖化というグローバル問題の前に、世界各国で、発電時にCO₂を排出しない原子力発電への期待が高まっ

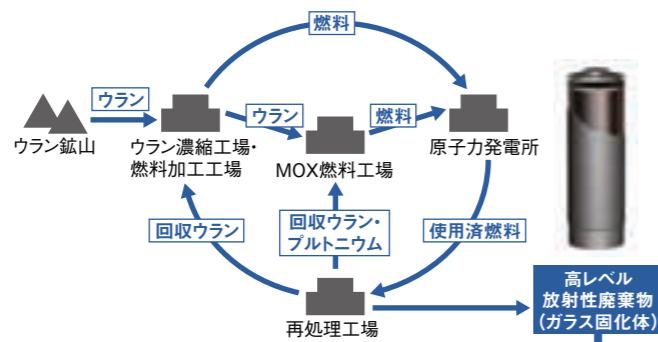
ているが、原子力発電には安全性・信頼性の確保、核不拡散など数々の課題もある。なかでも重要課題でありながら解決への道が遠いのが「高レベル放射性廃棄物」の処分問題だ。

高レベル放射性廃棄物とは、原子力発電所で使い終わった燃料(使用済燃料)から、再利用できるウランとプルトニウムを取り出した(再処理)後に残る物質のこと。その名のとおり放射能レベルが高いため、ガラスと溶かし合わせて、ステンレス容器内で冷やし固める。これを「ガラス固化体」といい、日本ではこれまで千六百六十四本のガラス固化体が発生(二〇〇九年末現在)。その大半が青森県六ヶ所村の貯蔵管理センターに置かれ、三十〜五十年の間、専



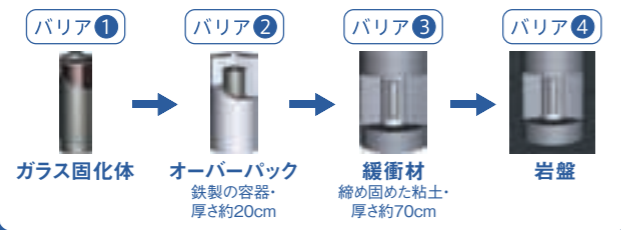
地下300m以深

再処理の過程で発生する高レベル放射性廃棄物



多重バリアシステム(例)

地下300mより深い、安定した地層(岩盤)で、長期間にわたって何重ものバリアで覆うことにより安全に処分



用施設で冷却貯蔵されている。問題はその後だ。高レベル放射性廃棄物の最終処分方法としては、地層処分のほか海洋投棄、

宇宙空間への投棄などが国内外で検討されてきたが、安全性等により現在では地層処分——地下深部の安定した地層に埋設し、

自然の恵みを享受して生きる

湿原にはより水分の多いヨシ・スゲ湿原と少し乾燥したミズゴケ湿原がある。木道の先でミズゴケ湿原に出た。植物の背丈が低くなり、三六〇度、見渡す限りの草原。頭上には空だけ。こんな広い場所を、ほかでは見たことがない。吹き抜ける風と鳥の声だけが聞こえ、街の細切の時間ではない、永遠のように繰り返されてきた季節の営みを実感した。

釧路湿原と炭鉱は、何千年、何万年と積み重なってきた自然の恵みを享受して生きていくことを実感できる場所だった。「この湿原も何千万年か後には貴重な石炭層になってるんじゃないかな」。竹中さんが笑う。四五〇万年とは言わないまでも、人は、せめて百年二百年、いや千年先の未来を考えて、目の前の自然に接しなければならぬのではないか。そんな思いを抱いた。

柴崎 友香 しばさきともか

一九七三年大阪府生まれ。大阪府立大学総合科学部卒。機械メーカー勤務を経て作家に。二〇〇〇年のデビュー作『きよのふき』が二〇〇四年、行定勲監督によって映画化され、話題になる。〇七年『その街の今は』で芸術選奨文部科学大臣新人賞、織田作之助賞大賞、咲くやこの花賞受賞。他の著書『主題歌』『青空感傷ツアー』『ショートカット』など。街に、人々の記憶に刻まれていくさまざまな瞬間を、柔らかな大阪弁で描き、共感を集めている。

<http://shiba-to.com/>

一年間の平均でも「3」という高さが評価され大ヒット商品となっているし、ヒートポンプエアコンに至ってはCOP「6」以上という高効率機器も登場。これら「高効率のヒートポンプ機器」と「高断熱仕様の躯体」を組み合わせれば、それだけで最大約四〇%の省エネが可能なほどだ。

この設備基準には「省エネ手法の選択肢を増やす」という意味合いもある。工法やコスト上の制約で次世代省エネ基準の断熱性能を達成できなくても、「代わりにエコキュートを採用しよう」とか「照明はLEDにしよう」とか、設備で工夫することができるといえる。

政府は今後も対策を進め、近い将来、住宅の省エネ基準の義務化をめざしている。義務化とはすなわち「省エネ基準を満たさない住宅は建ててはいけない」ということだから、ハードルが高まることは間違いだが、「設備込」という選択肢を設けたことで、多少なりともハードルの越え方に選択肢が増えるのではないかと。

但し、たとえ省エネ基準が義務化されても、これが適用されるのは新築住宅のみ。新築着工は〇八年のリーマンショック以降、年間八十万戸程度にまで減っているから、住宅の省エネ・省CO₂化を新築だけに頼れない。既築住宅は全国に四千七百万戸もあり、うち七割以上が九二年前以前に建てられたもの。つま

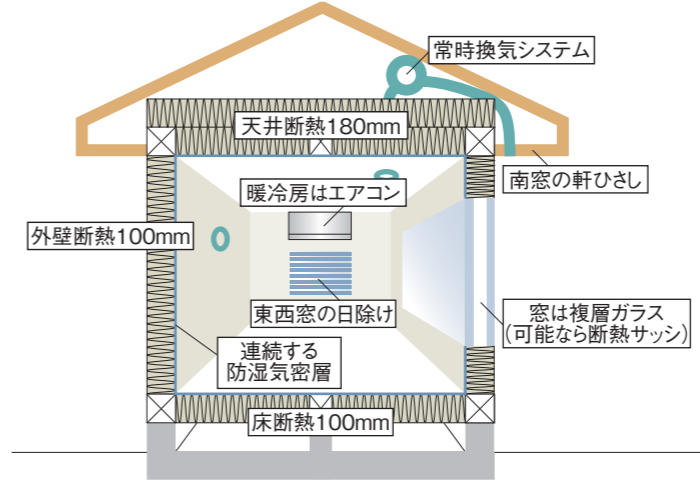
り、次世代省エネ基準どころか、その前の九二年制定の基準さえ満たしていない住宅が三千万戸以上もある。住宅の寿命としてはまだ二十年、三十年もあるわけで、今後もこのまま断熱性が低く暖冷房の効きも悪い「エネルギー浪費型」住宅に住み続けるのか——住宅分野の省エネ・省CO₂化の実現には、既築住宅の省エネ改修は避けて通れない重要課題だといえよう。

さらに最近の動きとしては、省エネ住宅のオプションとして、太陽の光と熱を使うことも考えられてきた。今後の技術革新は不可欠としても、制度的なバックアップもあり、徐々に普及が進むだろう。

エコキュートを中心としたオール電化に加え、省エネ家電やソーラー機器を装備した、高断熱の躯体の家——低炭素社会へ、人に快適で地球に優しい住まい方を実践するときに来ている。躍

さかもと ゆうぞう
 東京大学大学院工学系研究科 建築学専攻教授
 一九四八年札幌市生まれ。北海道大学理学部地球物理学科卒、東京大学大学院工学系研究科博士課程修了。建設省（現・国土交通省）建築研究所研究員、名古屋大学助教授などを経て、九七年より現職。建築環境工学を専門とし、国の省エネルギー基準策定などに参画。
<http://www.env.arch.t.u-tokyo.ac.jp/sakamoto/>

次世代基準で建てた住宅の仕様例



坂本雄三氏の資料をもとに作成

編集後記

猛暑、酷暑という言葉がびつたりだった今年の夏。だからというわけではありませんが、今号のテーマは「クールジヤパン」。いえ、涼しいではなく、「かっこいい！」——マンガやアニメ、音楽など諸外国から称賛されている「日本の文化力」を考えようというものです。

残暑厳しい土曜の昼下がり、日本文化発祥の地とも言える京都に、奥野卓司さん、秋元康さん、手塚真さんにお集まりいただいた「鼎談」では、江戸時代の状況や昨今の諸外国の動きを踏まえて日本の文化力を検証するとともに、今後の針路について興味深い話を展開いただきました。

話の終盤、東京から参加の二人に「マイペース」「エクストリーム（過激）」と評された関西。「ルポ」では雅楽や京懐石、信楽焼、タカラヅカと、独自性で世界を魅了する関西文化の底力を探りました。

また「エコルーツ紀行」では、猛暑の大阪を離れ、そこそ「クール」な北海道・釧路へ。柴崎友香さんと、日本最後の坑内掘り炭鉱と生物多様性の宝庫である日本最大の湿原を訪ね、四五〇〇万年の時を経て生み出された資源・植物起源の石炭とそれを育んだ自然の素晴らしさに思いを馳せました。空気が澄み空が高くなる季節、いつまでも四季を愛でられる日本であることを願いつつ、「躍」秋号をお届けします。

躍

題字 森 詳介(関西電力株式会社 取締役会長)

『躍』(やく)という誌名は、皆さまとともに「躍進」「飛躍」していきたい、また皆さまにとって「心躍る」広報誌でありたい、との思いを込めて名づけました。

『躍』の内容はホームページでもご覧いただけます。

<http://www.kepco.co.jp/yaku/>

発行●関西電力株式会社 地域共生・広報室

発行人／八嶋康博 編集人／横山実果

〒530-8270 大阪市北区中之島3丁目6番16号 電話06-7501-0240

企画／編集●株式会社エム・シー・アンド・ピー